

42416

教科書文庫

4
8/0
51-1938
20000 35913

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

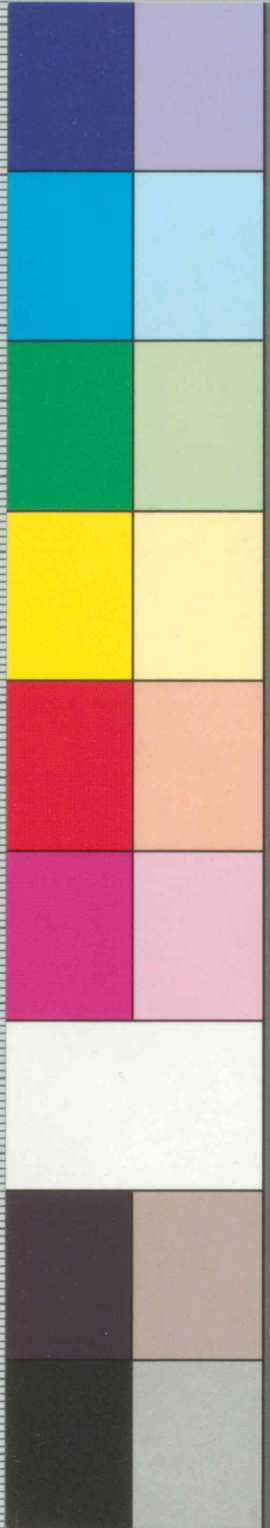
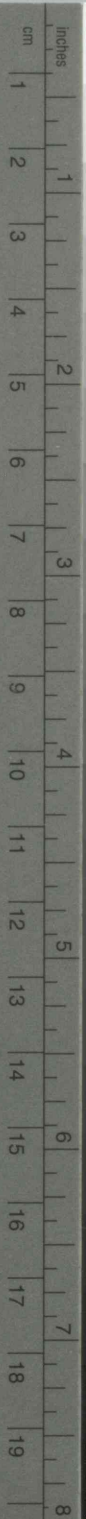


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

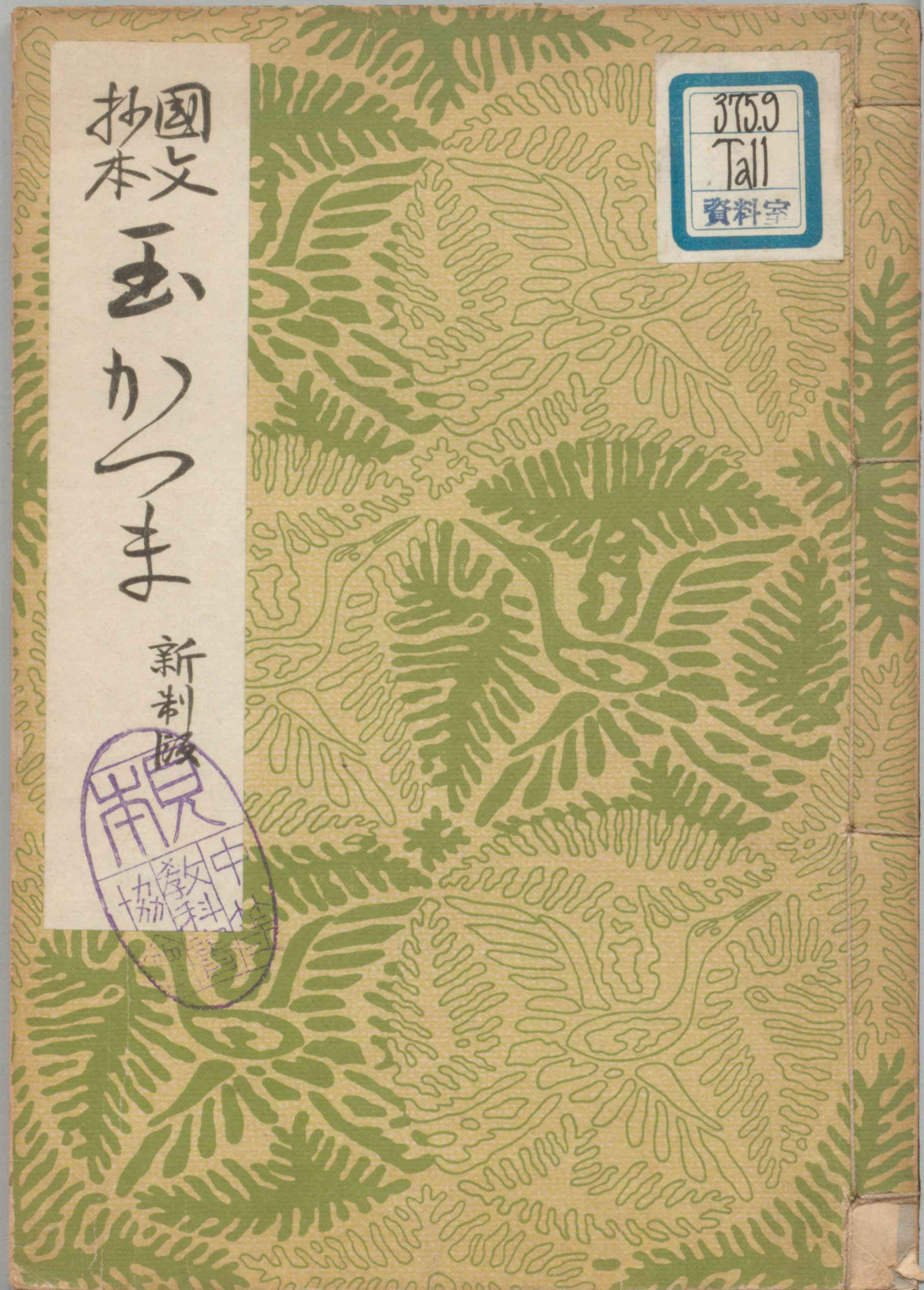
© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Tall  
資料室

抄國文  
玉かしま

新刊版





資料室

375.9  
Tail

日七十月二十年三十和昭  
**文部省檢定**  
用科文漢語國校學中・校學範師  
用科語國校學女等高

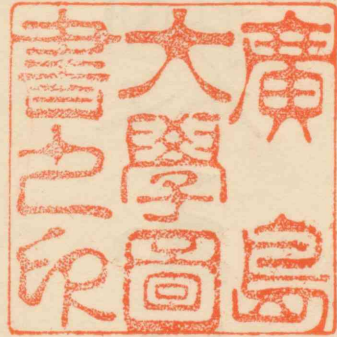
文學博士 武田祐吉編

國文  
抄本  
玉  
かつ  
ま  
新  
制  
版

高  
學  
年  
用

社 會 式 株  
田 神 ・ 院 書 治 明 ・ 京 東





例言

本書は師範學校、中學校、高等女學校等に於ける國語科増課教材として、昭和十二年三月文部省改正の新教授要目に準據し、本居宣長の「玉かつま」の中から抜粹精選して編纂校訂したものである。

「玉かつま」は、著者宣長が若年の頃より、思ひ寄つたこと、又諸書を讀んで書留めておいたことどもを、何くれとなく記し集めた隨筆で、目錄一卷を併せて十五卷あり、卷毎に一首の歌を詠んで、これに因んだ風雅な卷名を附けてゐる。例へば卷一を初若菜、卷二を櫻の落葉といふ類である。宣長は強く國學の必要を主張した人で、この書に論ずる所も、その旨趣に基づいてゐる。その文は雅文であつて、語法正確であり、古語を學ぶ上に益する所が多い。原文は假字が多いが、本書もなるべく原形を保存して、濫に漢字を充てることを避けて、假字文に習熟する機會を存することとした。



目次

- 一 初若菜.....五
- 二 縣居の大人は古學の祖なる事.....五
- 三 わたくしに記せる史.....七
- 四 もろこし書をも讀むべき事.....八
- 五 學問して道を知る事.....九
- 六 あらたなる説を出す事.....一〇
- 七 神典のときさま.....一一
- 八 風雅集の歌.....一三
- 九 ふみ讀む事のたとへ.....一四
- 一〇 新にいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事.....一四
- 一一 おのが物まなびのありしやう.....一七

- 一二 縣居の大人の御さとし言.....二二
- 一三 おのれ縣居の大人の教を受けしやう.....二三
- 一四 師の説になづまざる事.....二五
- 一五 わがをしへ子にいましめおくやう.....二六
- 一六 心の鬼.....二六
- 一七 ひとむきに偏る事の論ひ.....二九
- 一八 前後と説のかはること.....三三
- 一九 兼好法師が詞のあげつらひ.....三三
- 二〇 書うつし物かく事.....三五
- 二一 手かく事.....三六
- 二二 花のさだめ.....三六
- 二三 玉あられ.....三六
- 二四 古き名どころを尋ねること.....三九
- 二五 神わざのおとろへの敷かはしき事.....四〇

- 二六 於蘭陀といふ國のまなび.....四六
- 二七 ある人の言.....四六
- 二八 おのれとり分きて人に傳ふべきふしなき事.....五〇
- 二九 田舎に古の雅言の残れる事.....五一
- 三〇 萩の下葉.....五三
- 三一 田舎に古のわざの残れる事.....五三
- 三二 言の然いふ本の意を知らまほしくする事.....五五
- 三三 今の人の歌文ひがごと多き事.....五五
- 三四 歌も文もよく整ふは難き事.....五九
- 三五 富士谷成章といひし人の事.....五九
- 三六 桃花坊のふみぐらの書の事.....六一
- 三七 神をなほざりに思ひ奉る世のならひを悲しむ事.....六二
- 三八 物まなびの心ばへ.....六四

- 三九 古より傳はれる事の絶ゆるを悲しむ事.....六六
- 四〇 もろもろの物の事をよく記したる書あらまほしき事.....六七
- 四一 物をときさとす事.....七〇
- 四二 更級の日記に見えたる事.....七〇
- 四三 假字のさだ.....七一
- 四四 足る事を知るといふ事.....七三
- 四五 朝鮮の國にて加藤清正の人がたを射るわざ.....七三
- 四六 物まなびはその道をえらびて入りそむべき事.....七五
- 四七 八景といふ事.....七七
- 四八 金銀ほしからぬ顔する事.....七九
- 四九 雪螢を集めて書よみけるもろこしの故事.....七九
- 五〇 靜なる山林を住みよしといふ事.....八〇



五一	おのが京のやどりの事.....	八二
五二	つらつら椿.....	八三
五三	一言一行によりて人のよきあしきを定むる事.....	八三
五四	今の世人の名の事.....	八四
五五	繪の事.....	八四
五六	又.....	八五
五七	御の字.....	八六
五八	人のうまれつきさまざまある事.....	八七
五九	古よりも後の世のまされる事.....	八八
六〇	伊勢の國.....	八九
六一	神のめぐみ.....	九二
六二	道.....	九五

本居 宣長



まかつまの巻

くまかつまの巻

まよれバむしけしきくまかつまの巻

まが世あやしきくまかつまの巻

くまかつまの巻  
まよれバむしけしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻

五十師系山色抄丹

まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻  
まが世あやしきくまかつまの巻

まが世あやしきくまかつまの巻

〇一





初若菜 玉かつま第  
一卷の名稱。

水ぐき 瑞瑞しき莖  
の意で、筆をいふ。  
玉かつま、水莖の  
岡の條に「水ぐき  
は、みづみづしき  
莖といふことにて  
草木の莖也」  
縣居の大人 賀茂眞  
淵。元祿十年遠江  
に生れ、三十七歳  
の時上京して荷田  
春滿の門に入り、  
その逝去まで四年  
間これに隨ひ學  
び、四十二歳で江  
戸に出で明和六年  
(三四七)歿、年七十  
三。萬葉考・冠辭  
考等、著書數十種  
がある。

一 初若菜

この言草よ、なにくれと數おほくつもりぬるを、いとくだくだしけれど、やりすてむもさすがにて、かきあつめむとするを、けふは正月十八日子の日なれば、よしありておほゆるままに、まづこの卷の名、かく物しつ。次次のも、亦そのをりをり思ひよらむままた、何ともかともつけてむとす。

かたみとはのこれ野澤の水ぐきの淺くみじかきわかななりとも

二 縣居の大人は古學の祖なる事

からごころを清くはなれてもはら古のこころ詞をたづぬる學問は、わが縣居の大人よりぞはじまりける。この大人の學のい



古今集 古今和歌集二十卷。醍醐天皇の御代に勅命によつて紀貫之等四人これ撰した。

萬葉 萬葉集二十卷、現存せる最古の歌集。仁徳天皇より淳仁天皇に至る御代約四百年間の作品大凡四千五百首を収めてゐる。

古事記 三卷。神代より推古天皇の御代までの歴史を、古語をもつて記述

まだおこらざりしほどの世の學問は、歌もただ古今集よりこなたにのみとどまりて、萬葉などはただいと物どほく心も及ばぬ物として、さらにその歌のよきあしきを思ひ、ふるきちかきをわ



賀茂真淵

はただおのれみづから得たるごとと思ふめれど、みなこの大人の御蔭によらずといふことなし。又古事記書紀などの古典をうかがふにも、漢意にまどはされず、まづもはら古言を明らめ、古意に

きまへ、又その詞を今のおのが物としてつかふ事などは、すべて思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言をおのがものとして、萬葉ぶりの歌をもよみいで、古ぶりの文などをさへかきうることとなれるは、もはらこの大人のをしへのいさをにぞありける。今の人

した現存せる最古の國史書。元明天皇の和銅五年太安麻呂が勅を奉じて稗田阿禮の口誦せる所を撰録したものの。

書紀 日本書紀三十卷。神代より持統天皇の御代までの歴史を漢文で記したものの。六國史の一で、元正天皇の養老四年舍人親王が勅を奉じて修撰したものである。私に記せる史例へば大鏡・増鏡等の類。

おほくは神武天皇より始めて 水鏡・愚管抄等、神武天皇に始る。

よるべきことを人みなしれるも、この大人の萬葉のをしへのみたまにぞありける。そもそもかかるたふとき道をひらきそめられたるいそしみは、よにいみじきものなりかし。

三 わたくしに記せる史

よにおほやけの史にはあらで、私に御代御代の事を記せる書これかれとおほかるを、むかしの皇國人は佛をたふとばぬは一人もなかりしかば、かかる書にさへ、ともすれば要なきほとけざたのまじりて、うるさく、今見るにはかたはらいたきことおほし。又さかしら心に、神代にはあやしき事のみ多くして、からめかぬをいとひて、おほくは神武天皇より始めてしるして、神代のほどをばはぶけるは、から國のむねむねしき書にさるたぐひのあるを、よきことと思ひてならへる物なり。そもそも外つ國國は、その



王のすぢ定れる事なくしてよよにかはれば、心にまかせていづれの代より記さむも難なきを、御國の皇統はさらに外國の王のたぐひにはましまさず、天照らす大御神の天津日嗣にましまして、天地とともにとしへに傳はらせ給ふを、その本のはじめをはぶきすて、なからより記してよからめや。よろづをから國にならふも、事によりては心すべきわざぞかし。

四 もろこし書をも讀むべき事

から國の書をも、いとまのひまには隨分に見るぞよき。漢籍かむきも見ざれば、その外つ國のふりの悪しき事も知られず、又古き書は皆漢文もて書きたれば、かの國ぶりの文もしらでは學問もことゆき難ければなり。皇國だましひだに強くして動かざれば、夜晝からぶみを見ても、心は迷ふことなし。然れどもかの國ぶりとし

よさまに善い風に。

て、人の心さかしく、何事をもことわりをつくしたる様にこまかにあげつらひ、よさまに説きなせる故に、それを見れば、かしこき人もおのづから心うつりやすく、まどひやすきならひなれば、からぶみ見むには、常に此の事を忘るまじきなり。

五 學問して道を知る事

學問して道をしらむとならば、まづ漢意を清くのぞきさるべし。漢意の清くのぞこらぬほどは、いかに古書をよみても考へても古の意はしりがたく、古の意をしらでは道はしりがたきわざになむありける。そもそも道はもと學問をして知ることにはあらず、生れながらの眞心なるぞ道にはありける。眞心とは、よくもあしくも、うまれつきたるままの心をいふ。然るに、後の世の人は、おしなべてかの漢意にのみうつりて、眞心をばうしなひはてた



れば、今は學問せざれば、道をえしらざるにこそあれ。

六 あらたなる説を出す事

ちかき世、學問の道ひらけて、大かた萬のとりまかなひ、さとかしこくなりぬるから、とりどりにあらたなる説を出す人おほく、その説よろしければ、世にもてはやさるるによりて、なべての學者、いまだよくもとのほぬほどより、われおとらじと、よにことなるめづらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと、今の世のならひなり。その中には随分によろしきこともまれにはいにくめれど、大かたいまだしき學者の、心はやりていひ出づることは、ただ人にまさらむ勝たむの心にて、かろがろしくまへしりへをもよくも考へ合はさず、思ひよれるままにうち出づる故に、多くはなかなかなるいみじきひがごとのみなり。

すべて新なる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひおもひて、よくたしかなるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふ所なく、うごくまじきにあらずは、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、ほどへて後に、いま一たびよく思へば、なほわろかりけりと、我ながらだに思ひならるる事の多きぞかし。

七 神典のときさま

中昔よりこなた、神典を説く人ども、古の意詞（いごうご）をばたづねむ物とも思ひたらず、ただひたぶるに外つ國の儒佛の意にすがりて、その理をのみ思ひさたして、萬葉を見ず、むげに古の意詞をしらざるが故に、かのから意のことわりの外に、別にいにしへの旨ありて、明らかなることをえしらず。これによりて古のむねはこと



さらざるから  
まらざる故。

ごとくうづもれて顯れず、神の御ふみも、皆から意になりて、道明  
らかならざるなり。かくておのが神の御書をとく趣は、よのつね  
の説どもとばいたく異にして、世世の人のいまだいはざること  
どもなる故に、世の學者とりどりにとがむることおほし。されど  
そはただ、さきの人人のひたすら漢意にすがりて説きたる言を  
のみ聞馴れて、みづからも同じく、いまだからごころのくせの清  
くさらざるから、そのわろきことをえさとらざるものなり。おの  
がいふおもむきは、ことごとく古事記書紀にしるされたる古の  
傳説のままなり。世の人人のいふは、みなそのまどひ居る漢意に  
説き曲げたるわたくしごとにて、いたく古の傳説と異なり。この  
けぢめは、古事記書紀をよく見ば、おのづから分るべき物をや。も  
しおのが説をとがめむとならば、まづ古事記書紀をとがむべし。  
この御典どもを信ぜむかぎりは、おのが説をとがむることえじ。

八 風雅集の歌

風雅集に、後宇多天皇の大御歌、

天つ神國つやしろをいはひてぞわがあし原の國はをさ  
まる

これぞ、道の意にはよくかなへる大御歌なりける。人の國のごと、  
くさぐさこちたきわざはせさせ給はざりしかども、ただ神をい  
つきまつり給ひて、天の下のいとよく治りつるは、神の御國のす  
ぐれたるにて、上つ代はまことにしかこそありしか。同集賀の部  
に、花山院の前の内大臣、

我が君のやまと島根を出づる日はもろこしまでもあふ  
がざらめや

これも道の意にかなへるうたなり。

風雅集 風雅和歌集  
二十卷。後村上天  
皇の正平元年に最  
仁親王の撰せられ  
た歌集。

花山院の前の云々  
藤原師繼。龜山天  
皇。後宇多天皇の  
御代の廷臣。



須賀直見 伊勢の國  
の人、本居宣長の  
門人。和歌をよく  
した。

九 ふみ讀む事のたとへ  
須賀直見がいひしは、廣く大きな書をよむは、長き旅路をゆくが如し。おもしろからぬ處もおほかるを、經行きては、又おもしろくめさむることちする浦山にもいたるなり。又あしつよき人ははやく、よわきはゆくことおそきも、よく似たりとぞいひける。をかしたとへなりかし。

一〇 新にいひ出でたる説はとみに人のうけひかぬ事

大かたよのつねにことなる新しき説をおこすときには、よきあしきをいはず、まづ一わたりは世の中の學者にくまれ、それらるものなり。あるはおのがもとよりより來つる説といたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始より

ひたぶるにすてて、とりあげざる者もあり。あるは心のうちにはげにと思ふふしも多くあるものから、さすがに近き人のことにしたがはむことのねたくて、よしともあしともいはで、ただうけぬかほして過ぐすたぐひもあり。あるはねたむ心のすすめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあなたがちに求め出でて、すべてをいひつけたむとかまふる者もあり。大かたふるき説をば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき處をばおほひかくして、わづかに二つ三つのとるべき處のあるをとり立てて、力のかぎりたすけ用ひむとし、新しきは、十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことをいひたてて、八つ九つよきことをもおしけちて、ちからのかぎりは、我も用ひず人にも用ひさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。  
然れども、又まれまれには新なる説のよきを聞きては、ふるき



が悪しきことをさととりて、すみやかに改めしたがふたぐひなきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまては思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさてあるなどは、あらたなるよき説をききては、かくてこそはといみじくよろこびつつ、たちまちにしたがふたぐひもありかし。

大かた新なる説は、いかによくても、すみやかには用ふる人まれなるものなれど、よきは年を経てもおのづからつひには世の人のしたがつもものにて、あまねく用ひらるれば、その時にいたりては、はじめにねたみそしりしともがらも、心には悔しく思へど、おくればせにしたがはむも猶ねたく、人わろくおぼえて、こころよからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。

しか世の中の論さだまりて、皆人のしたがつよになりては、始よりすみやかに改めしたがひつる人は、かしこく心さとおも

はれ、ふるきにかかづらひてとかくとどこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるるわざぞかし。

## 一一 おのが物まなびのありしやう

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、萬よりもおもしろく思ひてよみける。さるは、はかばかしく師につきてわざと學問すともあらず、何と心ざすこともなく、そのすぢと定めたるかたもなく、ただからのやまとのくさぐさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、ふるきちかきをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほどより、歌よままほしく思ふ心いできて、よみはじめけるを、それはた師にしたがひてまなべるにもあらず、人に見することなどもせず、ただひとりよみ出づるばかりなりき。集ども、古きちかき、これかれと見て、かたの如



江戸にありし云々  
 本居家は、江戸大  
 傳馬町に店があつ  
 て、木綿問屋を營  
 んでゐたが、元文  
 五年に父の小津三  
 郎右衛門が死んで  
 その江戸の店の經  
 營が立たなくなつ  
 た。  
 母なりし人 村田孫  
 兵衛の女、名は勝。  
 明和五年（四三）  
 歿、年六十四。  
 くすしのわざ 醫師  
 の業。宣長は小兒  
 科を専攻した。  
 契沖 眞言宗の僧、  
 國學者。大阪に住  
 み、元祿十四年（  
 三二）歿。萬葉代匠  
 記等著書が多い。  
 餘材抄 古今餘材抄、  
 十卷。古今和歌集

く今の世のよみざまなりき。  
 かくてはたちあまりなりしほど、學問しにとて京になむのほ  
 りける。さるは、十一のとし父におくれしにあはせて、江戸にあり  
 し家のなりはひをさへにうしなひたりしほどにて、母なりし人  
 のおもむけにて、くすしのわざをならひ、又そのためによのつね  
 の儒學をもせむとてなりけり。

さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄を人にかりて見て、  
 はじめて契沖といひし人の説を知り、そのよにすぐれたるほど  
 をもしりて、この人のあらはしたる物、餘材抄勢語臆斷などを  
 じめ、その外もつぎつぎにもとめ出でて見けるほどに、すべて歌  
 まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、やうやうにわかまへさ  
 とりつ。さるままに、今の世の歌よみの思へるむねは、大かた心  
 かなはず、その歌のさまもをかしからずおぼえけれど、そのかみ

の註釋書。  
 勢語臆斷 五卷。伊  
 勢物語の註釋書。

國にかへり云々 寶  
 曆七年、宣長二十  
 八歳にして京の遊  
 學より生國伊勢に  
 歸つた。  
 冠辭考 十卷。賀茂  
 眞淵の著、枕詞を  
 解説した書。

同じ心なる友はなかりければ、ただよの人なみに、ここかしこの  
 會などにも出でまじらひつつ、よみありきけり。さて人のよむふ  
 りはおのが心にはかなはざりけれども、おのがたててよむふり  
 は、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞありける。

さて後、國にかへりたりしころ、江戸よりのほれりし人の、近き  
 ころ出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるにぞ、縣居の大人  
 の御名をも始めて知りける。かくてそのふみ、はじめに一わたり  
 見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠くあ  
 やしきやうにおぼえて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あ  
 るやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれまれ  
 にはげにさもやとおぼゆるふしも出できければ、又立ちか  
 へり見るに、いよいよげにとおぼゆることおほくなりて、見るた  
 びに信ずる心の出で來つつ、つひにいにしへぶりのこころこと



ばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説は、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびのありしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又道の學は、まづはじめより、神書といふすぢの物、ふるき近き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどよりわきて心ざしありしかど、とりたててわざとまなぶ事はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばむところざしはすすみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふものの説くおもむきは、みないたくたがへりとはやくさととりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねをかむがへ出でむとおもふころざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへすよみあぢはふほどに、いよいよ心ざしふかくなりつつ、この大人

一年 寶曆十七年宣  
長三十二歳の時。  
田安の殿 田安宗武。  
田安家は徳川氏の  
一門で、三卿の一  
であつた。  
松阪の里 宣長の郷  
里、今の三重縣松  
阪市。

名簿を奉りて 官位  
姓名年月日を書い  
て奉つて。これは  
門人となつた意に  
奉る。又主君とす  
る時にも奉る。  
物す 事を爲すこと  
を意味する語。す  
べての動作につい  
て云はれる。何を  
爲すかは、前後の  
文章によつて判斷  
される。こゝでは、  
書くこと。

をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安の殿の仰せごとをうけたまはり給ひて、この伊勢の國より、大和・山城など、ここかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、この松阪の里にも二日三日とどまり給へりしを、さることつゆしらで、後にきて、いみじくくちをしかりしを、かへるさまにも亦一夜やどり給へるをうかがひまちて、いとうれしく、いそぎやどりにまうでて、はじめて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教をうけたまはることにはなりたりきかし。

### 二三 縣居の大人の御さとし言

宣長、三十あまりなりしほど、縣居の大人のをしへをうけたまはり、そのめしころより、古事記の註釋を物せむのころざしありて、そのこと大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われ



ももとより神の御典みまことをとかむと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずはあるべからず。然るにそのいにしへのごころをえむことは、古言を得たるうへならではあたはず。古言をえむことは、萬葉をよく明らかむるにこそあれ。さる故に、吾はまづもはら萬葉をあきらめむとする程に、すでに年老いて、のこりのよはひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみをとくまでにといたることえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそしみ學びなば、その心ざしとぐるごころあるべし。ただし世の中の物まなぶともがらを見るに、皆ひきき處を経ずて、まだきに高きところのぼらむとする程に、ひききところをだにうるごころあたはず、まして高き處はうべきやうなければ、みなひがごとのみすめり。このむねをわすれず心にしめて、まづひききところよりよ

くかためおきてこそ、たかきところにはのぼるべきわざなれ。わがいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはらこのゆゑぞ。ゆめしなをこえて、まだきに高き處をなのぞみそ」といとねもごころになむいませしめさとし給ひたりし。

この御さとし言のいとたふとくおほえけるままに、いよいよ萬葉集に心をそめて、深く考へくりかへし問ひただして、いにしへのごころ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふものの神の御ふみを説ける趣は、みなあらぬから意のみにして、さらにまことの意はえ得ぬものになむありける。

一三 おのれ縣居の大人の教を受けしやう

宣長、縣居の大人にあひ奉りしは、この里に一夜やどり給へりし折、一度のみなりき。その後はただしばしば書かよはしきこえ

この里 宣長の郷里  
なる松阪。



古訓古事記 三卷。  
宣長の説に依つて  
訓點を附けた古事  
記。

假名がき 古事記の  
原書は漢字ばかり  
で書いてあるが、  
それを假名書に改  
めたものである。  
古事記傳 古事記の  
註釋書として最も

てぞ、物はとひあきらめたりける。そのたびたび賜へりし御こたへ  
へのふみども、いとおほくつもりにたりしを、ひとつもちらさず、  
いつきもたりけるを、せちに人のこひもとむるままに、ひとつふ

天地初發之時於高天原成神名天之  
御中主神訓高下天云次高御產巢日  
神次神產巢日神此三柱神者並獨神  
成坐而隱身也次國稚如浮脂而久羅  
下那洲多陀用幣瓊之時瓊字以上如  
葦牙因崩騰之物而成神名字麻志阿  
斯訶備比古遲神此神名次天之常立

古訓古事記

きにし給へるをもかし給ひ、又中つ巻下つ巻は、かたはらの訓を  
改め、處處書きいれなどをもてづからし給へる本をもかし給へ  
りき。古事記傳に師の説とて引きたるは、多くその本にある事ど

詳しいもので、四  
十八巻の大部に上  
つてゐる。宣長は  
明和元年より寛政  
十年に至る三十五  
年間不斷の努力を  
重ねて之を完成し  
た。

もなり。

そもそもこの大人いしへまなび古學の道をひらき給へる御いさをは、申す  
もさらなるを、かのさとし言にのたまへるごとく、よのかぎりも  
はら萬葉にちからをつくされしほどに、古事記書紀にいたりて  
は、そのかむがへいまだあまねく深くはゆきわたらず、くはしか  
らぬ事ども多し。されば道を説き給へることも、こまかなる事  
しなれば、大むねもいまださだかにあらはれず、ただ事のついで  
などに、はしばしいささかづつのたまへるのみなり。又からご  
ころを去れることも、なほ清くはさりあへ給はて、おのづから猶  
その意におつることもまれまれにはのこれるなり。

一四 師の説になづまざる事

おのれ古典いしへまなびをとくに、師の説とたがへること多く、師の説のわ

師 賀茂真淵。



おほかんめれど「多くあるめれど」の轉。

ろき事あるをばわきまへいふこともおほかるをいとあるまじきことと思ふ人おほかんめれど、これすなばちわが師の心にて、つねにをしへられしは、後によき考の出で來たらむには、かならずしも師の説にたがふとて、なはばかりそとなむ教へられし。こはいとたふときをしへにて、わが師のよにすぐれ給へる一つなり。

大かた古をかむがふること、さらにひとり二人の力もて、ことごとくあきらめつくすべくもあらず、又よき人の説ならむからに、多くの中には誤もなかなからむ。必ずわろきこともまじらではえあらず。そのおのが心には、今はいにしへのころことごとく明らかなり、これをおきてはあるべくもあらずと思ひ定めたることも、おもひの外に、又人のことなるよきかむがへもいてくるわざなり。あまたの手を経るまにまに、さきざきの考のうへ

をなほよく考へきはむるからに、つぎつぎにくはしくなりもて行くわざなれば、師の説なりとて、かならずなづみ守るべきにもあらず。よきあしきをいはず、ひたぶるにふるきをまもるは、學問の道にはいふかひなきわざなり。

又おのが師などのわろきことをいひあらはすは、いともかしこくはあれど、それもいはざれば、世の學者、その説にまどひて、長くよきをしる期なし。師の説なりとして、わろきをしりながら、いはずつつみかくして、よさまにつくろひをらむは、ただ師をのみたふとみて、道をば思はざるなり。宣長は道を尊み、古を思ひて、ひたぶるに道の明らかならむ事を思ひ、古の意のあきらかならむことをむねと思ふが故に、わたくしに師をたふとむことわりのかけむことをば、えしもかへりみざることあるを、猶わろしとそしらむ人はそしりてよ。そはせむ方なし。われは人にそしられじ、



よき人にならむとて、道をまげ、古の意をまげて、さてあるわざはえせずなむ。これすなはちわが師の心なれば、かへりては師をたふとむにもあるべくや。そはいかにもあれ。

一五 わがをしへ子にいましめおくやう

吾にしたがひて物まなばむともがらも、わが後に又よきかむがへのいできたらむには、かならずわが説にななづみそ。わがあしきゆゑをいひて、よき考をひろめよ。すべておのが人ををしふるは、道を明らかにせむとなれば、かにもかくにも道をあきらかにせむぞ。吾を用ふるにはありける。道を思はでいたづらにわれをたふとまむは、わが心にあらざるぞかし。

一六 心の鬼

物語ぶみな、どに、身にあやまちのあるもの、人はさることしらねども、おのが心からおそるるを、心の鬼といへり。からぶみ列子の注に、疑心生闇鬼うごといへることあり。こころばへよく似たることなり。

列子 支那古代の哲學者列御寇の著。

一七 ひとむきに偏る事の論かたむしひ

世の物しり人の、人のときごとのあしきをとがめず一むきにかたよらずこれをもかれをもすてぬさまに論ひをなすは、多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人はいかにそしるとも、わが思ふすぢをまげてしたがふべきことにはあらず。人のほめそしりにはかかはるまじきわざぞ。

大かた一むきにかたよりて、あだし説をばわろしととがむる



をば、心せばくよからぬこととし、ひとむきにはかたよらず、あだし説をもわろしとはいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心なめれど、かならずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定まりて、それを深く信ずる心ならば、かならずひとむきにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをばとるべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、みなあしきなり。これよければ、かれはかならずあしきことわりぞかし。然るを、これもよし、又かれもあしからずといふは、よるところさだまらず、信ずべきところを深く信ぜざるものなり。よるところさだまりて、それを信ずる心の深ければ、それにことなるすぢのあしきことをば、おのづからとがめざることあたはず。これ信ずるところを信ずるまめごころなり。人はいかにおもふらむ。われは一むきにかたよりにて、あだし説をばわろしとがむるも、かならずわろしとは思はずなむ。

一八 前後と説のかはること

同じ人のときごとの、こことかしことゆきちがひてひとしからざるは、いづれによるべきぞとまどはしくて、大かたその人の説すべてうきたるここのせらるる、そは一わたりはさることなれども、なほさしもあらず。はじめより終まで説のかはれることなきは、なかなかにかしからぬかたもあるぞかし、はじめに定めおきつる事の、ほどへて後に、又ことなるよき考の出で来るは、つねにある事なれば、はじめとかはれることあるこそよけれ。年をへて學問すすみゆけば、説はかならずかはらでかなはず。又おのがはじめの誤を、後にしりながらは、つつみかくさできよく改めたるも、いとよき事なり。



殊にわが古學の道は、近きほどよりひらけそめつることなれば、すみやかにことごとくは考へつくすべきにあらざ。人をへ年を経てこそ、つぎつぎに明らかには成りゆくべきわざなれば、一人のときごとの中にも、さきなると後なると異なることは、もとよりあらではえあらぬわざなり。そは一人の生いきのかぎりのほどにも、つぎつぎ明らかになりゆくなり。

さればそのさきのと後のとの中には、後の方をぞその人のさだまれる説とはすべかりける。但し又、みづからこそ、はじめのをばわろしと思ひて改めつれ、又のちに人の見るには、なほはじめのかたよろしくて、後のはなかなかにわろきもなきにあらざれば、とにかくえらびは見む人のころになむ。

兼好法師 歌人、隨筆家。正平五年(二

一九 兼好法師が詞のあげつらひ

〇〇〇)歿。年六十九。徒然草 二卷。隨筆集。

兼好法師が徒然草に、花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かとはいかいへるは、いかにぞや。いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲をいとひ、あるはまちをしむ心づくしをよめるぞ多くて、こころ深きも、ことにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく、月はくまなからむことをおもふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを歎きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風をまち、月に雲をねがひたるはあらむ。さるをか法師がいへるごとくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくり風流みづりにして、まことのみやびごころにはあらず。かの法師がいへる言ども、このたぐひ多し。皆同じ事なり。すべてなべての人のねがふ心にたがへるを、風流とするは、つくりごとぞおほかりける。人の心は、うれしき事はさしもふかくはおぼえぬも



のにて、ただ心にはぬことぞ深く身にしみてはおぼゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には心深きはすくなくて、心にはぬすぢをかなしみうれへたるにあはれなるは多きぞかし。然りとて、わびしくかなしきをみやびたりとてねがはむは、人のまことの情ならめや。

又同じ法師の、人はよそぢにたらでしなむこそめやすかるべけれといへるなどは、中ごろよりこなたの人の、みな歌にもよみつねにもいふすぢにて、いのち長からむことをねがふをば、心ぎたなきこととし、早く死ぬるをめやすきことにいひ、この世をいとひすつるをいさぎよきこととするは、これみな佛の道にへつらへるものにて、おほくはいつはりなり。言にこそさもいへ、心のうちにはたれかはさは思はむ。たとひまれまれにはまことに然思ふ人のあらむも、もとよりのまごころにはあらず、佛のをしへ

にまどへるなり。人のまごころは、いかにわびしき身も、はやくしなばやとはおもはず、命をしまぬものはなし。されば萬葉などのころまでの歌には、ただ長くいきたらむ事をこそねがひたれ。中ごろよりこなたの歌とは、そのこころうらうへなり。すべて何事も、なべての世の人のま心にさかひて、ことなるをよきことにするは、外つ國のならひのうつれるにて、心をつくりかざれる物としるべし。

## 二〇 書うつし物かく事

ふみをうつすに、同じくだりのうち、あるはならべるくだりなどに、同じ詞のあるときは、見まがへて、そのあひだなる詞どもを寫しもらすこと、つねによくあるわざなり。又一ひらと思ひて二ひら重ねてかへしては、その間一ひらを見ながらおとすことも



あり。これらつねに心すべきわざなり。又よく似て、見まがへやす  
 きもじなどは、ことにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これ  
 は寫しがきのみにもあらず、おほかた物かくに心得べき事ぞ。す  
 べて物をかくは、事のころをしめさむとてなれば、おふなおふ  
 なもじさだかにこそかまほしけれ。さるをひたすら、筆のいき  
 ほひを見せむとのみしたるは、いかなることともよみときがた  
 きが、よにおほかる、あぢきなきわざなり。常にかきかはす消息文  
 なども、もじよみがたくては、いひやるすぢゆきとほらず、よむ人  
 はたくるしみて、かしらかたぶけつつかへさひよめども、つひに  
 よみえずなどしては、「ここよみがたし」とかへしとはむも、さすが  
 になめしきやうなれば、ただおしはかりに心得ては、事たがひも  
 するぞかし。

二 手かく事

よろづよりも手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ學問な  
 どする人は、ことに手あしくては、心おとりのせらるるを、それ何  
 かはくるしからむといふも、一わたりことわりはさることなが  
 ら、なほあかずうちあはぬここちぞするや。

宣長いとつたなくて、常に筆とるたびに、いとくちをしう、いふ

年のはしめに  
 よめる  
 さし出る此日の本  
 のひかりよりこま  
 もろこしも春をし  
 るらむ  
 宣長

年のはしめに  
 よめる  
 さし出る此日の本  
 のひかりよりこま  
 もろこしも春をし  
 るらむ  
 宣長

蹟筆長宣居本

かひなくおほゆるを、人のこふままに、おもなくたんざく一ひら  
 などかき出でて見るにも、我ながらだにいとかたはに見ぐるし  
 うかたくななるを、人いかに見るらむとはづかしくむねいたく  
 て、わかかりしほどになどててならひはせざりけむと、いみじう



くやしくなむ。

三三 花のさだめ

花はさくら。櫻は山櫻の、葉あかくてりてほそきがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物もなく、うき世のものとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた山ざくらといふ中にもしなじなのありて、こまかに見れば、一木ごとにいささかかはれるところありて、まったく同じきはなきやうなり。又今の世に桐がやつ、八重一重などいふも、やかはりていとめでたし。すべてくもれる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何もあをやかにしげりたるこなたに咲けるは、色はえてことに見ゆ。空きよくはれたる日、日影のさすかたより見たるは、にほひこよなくて、おなじ花ともおほえぬ

桐がやつ、櫻の一種で、花は薄色、多くは八重の上品なもの。鎌倉の桐ヶ谷から出るといふ。八重一重、桐がやつ、の別名とされてゐるが、こゝは多少別のものを指してゐる。

までなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅。ひらけさしたるほどぞいとめでたきを、さかりになるままに、やうやうしらせゆきて、見どころなくなるこそ、いとくちをしけれ。さくらの咲けるころまでも、ちることしらで、むげににほひなく、ねびれしほみてのこりたるを見れば、げに「ありて世の中は、何事もみなかくこそと、見る春ごとに思ひしらるか。白きはすべて香こそあれ、見るめはしなおくれたり。大かた梅の花は、ちひさき枝を物にさしてちかく見たるぞ、梢ながらよりはまされる。

桃の花は、あまた咲きつづきたるを、遠く見たるはよし。ちかくてはひなびたり。山ぶきかきつばたなでしこ、萩すすき。女郎花など、とりどりにめでたし。菊もよきほどにつくろひたるこそよけれ。あまりうるはしくしたたかにつくりなしたるは、中中にしな

ありて世の中、古今和歌集、よみ人知らず、残りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中は、てのうければ。」



なく、なつかしからず。躑躅、野山に多く咲きたるは、めさむるこ  
 ちす。海棠といふ物、からめきて、こまやかにうるはしき花なり。  
 もももかくいふは、みなおのが思ふ心にこそあれ。人は又お  
 もふところことなるべければ、ひとやうにさだむべきわざには  
 あらず。又いまやうのよの人のもてはやすめる花どももよにお  
 ほかるを、かぞへいでぬは、ことさらめきたるやうなれど、歌にも  
 よみならず、ふるき物にも見えたることなきは、心のなしにや、な  
 つかしからずおほゆかし。されどそれはたひとやうなるひがご  
 ころにやあらむ。

二三 玉あられ

宣長、ちかきころ玉あられといふ書をかきて、近き世にあまね  
 く誤りならへることどもをあげて、うひまなびのともがらをさ

玉あられ 一卷。同  
 の用法、文法の誤  
 などを指摘した  
 書。

とせるを、宣長がをしへ子として、何事も宣長が言にしたがふと  
 もがらの、その後のこのごろの歌文に、この書に出せる事どもを、  
 なほ誤ることの多かるは、いかなるひがごとぞや。この書用ひぬ  
 よそ人は、いふべきかぎりにあらざるを、それだに心さときはう  
 はべこそ用ひざる顔つくれげにとおほゆるふしぶしはたちま  
 ちにさとりて、ひそかに改むるたくひもあるを、まして宣長が教  
 をよしとしてしたがひながら改めざるは、このふみよみても心に  
 とまらず、やがてわすれたるにて、そはもとより心にしまずなほ  
 ざりに思へるからなり。つねに心にしめたるすぢは、一たび聞き  
 ては、しかたちまちにわするる物にはあらざるを、よそ人の思は  
 む心もはづかしからずや。これは玉あられのみにもあらず、いづ  
 れの書見むもおなじことぞかし。



神祇官の帳 延喜式  
の巻の九・十の神  
名帳のこと。官幣  
を奉る神社の名を  
列記したもの。神  
祇官は神社に關す  
る事を司る役所。  
中ごろの世の亂れ  
吉野朝時代から室  
町時代にわたる戰  
亂をいふ。

二四 古き名どころを尋ぬること

ふるき神の社の、今は絶えたる、又絶えざれどもさだかならず  
なりぬるなど、いづくにも多かるは、いとかなしきわざなり。神祇  
官の帳にのこれるなどは、かけてもさはあるまじきわざなるを、  
中ごろの世のみだれに、天の下のよろづの事も、古のおきても、皆  
みだれにみだれ、たえうせに絶えうせにたる、萬につけていとも  
いともかなしきは、亂れ世のしわざなりけり。

さるを、今の御代はいにしへにもまれなるまでよく治りて、い  
ともめでたく、天の下榮えにさかゆるままに、よろづに古をたづ  
ねて、絶えたるをおこし、おとろへたるを直し給ふ御代にしあれ  
ば、神の社どもは殊に古に立ちかへりて榮ゆべき時なりけり。然  
あるにつけては、絶えたるは跡をだにさだかにたづねまほしく、  
又今もありながらさだかならず疑はしきをば、よく考へ尋ねて、

歌枕 歌に詠み入れ  
られる名處。

たしかにそれと定めしらまほしきわざになむありける。

次には、神の社ならぬも、いにしへに名あるところどころ、歌枕  
なども、今はさだかならぬが多かるは、かかるめでたき時世にあ  
たりて、尋ねおかまほしきわざなり。

かくて神の社にまれ、御陵にまれ、歌まくらにまれ、何にまれ、は  
るかなるいにしへのを、中ごろとめ失ひたるを、今の世にしてた  
づね定めむことは、大かたたやすからぬわざになむありける。そ  
の故をいはむには、まづこのふるき處をたづぬるわざは、ただに  
古の書どもを考へたるのみにては知りがたし。いかにくはしく  
考へたるも、書もて考へ定めたることは、その處にいたりて見聞  
けば、いたく違ふことの多きものなり。よそながらはさだかなら  
ぬ處も、その國にてはさすがに書きも傳へ、かたりも傳へて、まが  
ひなきこともあり。さればみづからその處にいたりて見もし、そ



この事よくしれる人にとひききなどもせては、事たらず。又ただ一たびものして見聞きたるのみにても、猶たらず。ゆきて見聞きて、立ちかへりて又書どもと考へ合はせて、又又もゆきてよく見聞きたるうへならでは、定めがたかるべし。

さて又その處の人にあひてとひきくにも、心得べきことくさぐさあり。いにしへの事をあまりたしかにしりがほにかたるは、おほくは書のかたはしをなまなまにかむがへなどしたるもの、おのがさかしらもてさだめいふが多ければ、そはいと頼みがたくなかなかのものぞこなひなり。又世に名高き處などをば、外なるをも、しひておのが國おのが里のにせまほしがるならひにて、ただいささかのよりどころめきたることをも、かたくとらへて、しひてここぞといひなして、しるしを作るたぐひなど、はたよに多きを、さる心してまどふべからず。ふみなどはむげに見たる

ことなき、ひたぶるのしづのを、おほえゐてかたることは、しり口あはず、しどけなく、ひがごとのみおほかれど、その中にはかへりてをかしき事もまじるわざなれば、さるたぐひをも心とどめてきくべきわざなり。されど又むかしなまなまの物しり人などの尋ねきたるが、ひがさだめして、ここはしかじかの跡などをしへおきたるをききをりて、里人はまことにさることと信じて、子らまごなどにもかたりつたへたるたぐひもあんなれば、うべうべしくきこゆることも、なほひたぶるにはうけがたし。

又みづからそのところのさまをゆき見てさだむるにも、くさぐさこころうべきことどもあり。おほかた處のさま神さびて、木立しげく、物ふりなどしたるを見れば、ここそはとめとまる物なれど、それはたうちつけには頼みがたし。大かたにならぬ處にも、ふるめきたる森林などは多くあるものなり。木だちなど二



三百年をもへぬるは、いと物ふりて見ゆるものなれば、ふるく見ゆるにつきても、たやすくは定めがたきわざなりかし。村の名、山川・浦・磯などの名に心をつけて尋ねべし。田どころなどのあざなといふものなどをもよく尋ねべし。寺の名に古きがのこれるがよくあることなり。しかはあれども、又すべて名によりて誤ることもあるわざなり。又寺寺の縁起といふ物、おほかた例の法師のそらごとがちなれど、その中にまれまれにはとるべきこともまじれるものなれば、これはたひたふるにはすつべきにあらず。ふるきあとは、中ごろ法師どもの國人をあざむきて、佛どころにしなしたるが、いづれの國にも多ければ、ほとけどころをもその心してたづぬべし。ふるき寺には、古き書きものなどありて、古き事ののこれるおほしむげに尋ねべきたづきなき處も、思ひかけぬところより、たしかなるしるしの出で來るやうもあれば、い

縁起 神社佛閣等の  
草創の由來及び靈  
驗などを記したも  
の。

たらぬくまなく、よろづに思ひめぐらして、くはしく尋ねべし。かくて尋ねえたりと思ふところも、なほたしかには定むべからず。よにさるべき人の定めおきつる處などは、ひがさだめなるも、つひにそこにさだまりて、後のまどひとなるわざなりかし。そもそもこのくだりは、名處をたづぬるわざのみにもあらず、よろづのかむがへにもわたることどもありぬべくなむ。

二五 神わざのおとろへの歎かはしき事

よろづよりも世の中に願はしきは、いかでもろもろの神の社のおとろへをもて直し、もろもろの神わざをおこさまほしくこそ。今の世の神の社、神事のさまは、おほかた中ごろのみだれ世にいたくおとろへすたれたるままなるを、今の世の人は、ただ今のさまをのみ見て、いにしへよりもかかるものとぞ思ひたんめる。



まれまれ書をよむ人なども、ただからぶみをのみむねとはよみて、その心もてよろづをさたして、皇國のふるきふみどもをばをさをさよむ人もなければ、古の御代には、神の社、神事をむねと重くし給ひしことをばしらず。又まれにはしれる人もあれども、なほ今の世のならひにまぎれては、いにしへを思ひくらべて、これを深く歎く人のなきこそいと悲しけれ。

二六 於蘭陀といふ國のまなび

ちかき年ごろ、於蘭陀といふ國の學問をする事はじまりて、江戸などにそのともがらかれこれとあめりある人もはらそのまなびをするがいひけるおもむきをきくに、於蘭陀はその國人、物かへに遠き國國をあまねくわたりありく國なれば、その國の學問をすれば、遠き國國のやうをよくしる故に、漢學者のかの國に

於蘭陀 歐洲の西北部にある一國。當時徳川幕府は、外國との交通を禁止し、僅に天主教に關係のないこの國のみに來航を許してゐた。  
あめり「あめり」の約。

のみなづめるくせのあしきことのしらるるなり。あめつちのあひだ、いづれの國もおのおのその國なれば、必ず一むきにかたよりなづむべきにあらずとやうにおもむけいふめり。

そはかのもろこしにのみなづめるよりはまさりて、一わたりさることとは聞ゆれども、なほ皇國の萬の國にすぐれて尊きことをばしらざるにや、萬の國の事をしらば、皇國のすぐれたるほどはおのづからしるならむものを、なほ皇國を尊むことをしらざるは、かのなづめるをわろしとするから、ただなづまぬをよしとして、又これになづめるにこそあらめ。於蘭陀にはあらぬよのつねの學者にも、今はこのたぐひもあるなり。

二七 ある人の言

櫻の花ざかりに、歌よむ友だち、これかれかいつらねて、そこか



まる 自分のこと。  
古語の第一人稱。

しこ見ありきけるかへるさに、見し花どもの事かたりつつ來るに、ひとりがいふやう、まろは歌よまむと思ひめぐらしける程に、けふの花はいかにありけむ、こまやかに見ずなりぬ」といへるは、をこがましきやうなれど、まことはたれもさもあることと、をかしくぞ聞きし。

二八 おのれとり分きて人に傳ふべきふしなき事

おのれは、道の事も、歌の事も、縣居の大人の教のおもむきによりて、ただ古の書どもをかむがへさとれるのみこそあれ。その家の傳へごととは、うけつたへたることさらになければ、家家のひめごとなどいふかぎりはいかなる物にか、一つだにされることなし。されば又、人にとりわきて殊に傳ふべきふしもなし。すべてよき事は、いかにもいかにも世にひろくせまほしく思へば、い

にしへの書どもを考へてさとりえたりと思ふかぎりは、みな書にかきあらはして、つゆものこしこめたることはなきぞかし。おのづから、おのれにしたがひて物まなばむと思はむ人あらば、ただあらはせるふみどもをよく見てありぬべし。そをはなちて外には、さらにをしふべきふしはなきぞとよ。

二九 田舎に古の雅言みやげことの残れる事

すべてゐなかにはいにしへの言ののこれること多し。殊にとほき國人のいふ言の中には、おもしろき言どもぞまじれる。おのれとしごろ心をつけて、遠き國人のとぶらひきたるには、必ずその國の詞をとひききもし、その人のいふ言をも心とどめてききもするを、なほ國國の詞どもをあまねく聞きあつめなば、いかにおもしろきこと多からむ。



ちかきころ肥後の國人の來たるがいふことをきけば、世に見  
 える「聞える」などいふたぐひを「見ゆる」「聞ゆる」などぞいふなる。こ  
 は今の世にはたえて聞えぬ雅びたることばづかひなるを、その  
 國にてはなべていふにや」とひければ、「ひたぶるの賤山がつは  
 皆見ゆる。聞ゆるさゆるなどやうにいふを、すこしことばをもつ  
 くろふほどの者は、多くは見える。聞えるとやうにいふなり」とぞ  
 語りける。そはなかなか今の世のいやしきいひざまなるを、なべ  
 て國國の人のいふから、そをよきことと心得たるなんめり。いづ  
 れの國にても、しづ山がつのいふ言はよこなまりながらも、おほ  
 く昔の言をいひつたへたるを、人しげくにぎはしき里などは、他  
 國人も入りまじり、都の人などもことにふれてきかよひなどす  
 るほどに、おのづからここかしこの詞を聞きならひては、おのれ  
 もことえりして、なまさかしき今やうにうつりやすく、昔さま

たにぐく 蕨の古名。

にとほく、中中にいやしくなむなりもてゆくめる。まことや同じ  
 肥後の國の又の人のいへる、かの國にて、ひきがへるといふもの  
 を、たんがくといふなるは、古のたにぐくの訛よこなまりなるべくおほゆと  
 語りしは、まことに然なるべし。このたぐひのこと、國國になほ聞  
 けることおほかるを、今はふと思ひ出でたることをいふなり。な  
 ほおもひいでむままたにもいふべし。

三〇 蕨の下葉

人はこずはぎのしたばもかつちりて嵐はさむし秋の山  
 ざと

はもじを重ねたるいにしへの歌どもを見て、ふとをかしきふ  
 しにおぼえたるままに、われもいかでとよみ出でたるなり。きこ  
 えてやあらむ、聞えずやあらむ。われは聞えたりと思ふとも、人の

はもじを重ねたるい  
 にしへの歌ども 例  
 へば、萬葉集卷十  
 七、大伴家持、「鶯  
 は今は鳴かむと片  
 待てば霞たなびき  
 月は經につつ。」



見たらむには、いかがあらむ、きこえずやあらむ、しらずかし。

三二 田舎に古のわざの残れる事

詞のみにもあらず、よろづのしわざにも、かたゐなかには、いにしへさまのみやびたることののこれるたぐひ多し。さるを例のなまさかしき心ある者の立ちまじりては、かへりてをこがましくおぼえて、あらたむるから、いづこにもやうやうにふるき事のうせゆくは、いとくちをしきわざなり。葬禮はふりつぎ・婚禮とらむつぎなど、ことに田舎にはふるくおもしろきことおほし。すべてかかるたぐひの事どもをも、國國のやうを、海づら山がくれの里里まで、あまねく尋ね聞きあつめて、物にもしるしおかまほしきわざなり。葬祭などのわざ後の世の物しり人の考へ定めたるは、中中からごころのさかしらのみ多くまじりて、ふさはしからず、うるさしかし。

三三 言の然いふ本の意を知らまほしくする事

物まなびするともがら、古き言のしかいふもとの意をしらまほしくして、人にもまづとふこと常なり。然いふ本のこころとは、たとへば、天あめといふはいかなる意ぞ、地ちといふは如何なる意ぞといふたぐひなり。これも學の一つにて、さもあるべきことにはあれども、さしあたりてむねとすべきわざにはあらず。大かたいにしへの言は、然いふ本の意をしらむよりは、古人の用ひたる意をよく明らめしるべきなり。用ひたる意をだによくあきらめなば、然いふ本の意はしらでもあるべきなり。

そもそも萬の事、まづその本をよく明らめて、末をば後にすべきは論なけれど、然のみにもあらぬわざにて、事のさまによりては、末よりまづ物して、後に本へはさかのぼるべきもあるぞかし。



大かた言の本の意はしりがたきわざにて、われ考へえたりと思ふも、あたれりやあらずや、さだめがたく、多くはあたりがたきわざなり。されば言のはの學問は、その本の意をしることをばのどめおきて、かへすがへすもいにしへ人のつかひたる意を、心をつけてよく明らむべきわざなり。たとひその本の意はよく明らめたらむにても、いかなるところにつかひたりといふことをしらでは、何のかひもなく、おのが歌文に用ふるにもひがごとのあるなり。今の世、古學をするともがらなど、殊にすこしとほき言といへば、まづ然いふ本の意をしらむとのみして、用ひたる意をば考へむとせざる故に、おのがつかふに、いみじきひがごとのみ多きぞかし。

すべて言は、しかいふ本の意と用ひたる意とは、多くはひとしからぬものなり。たとへば、なかなかといふ言は、もとこなたへもかなたへもつかず、中間なからなる意の言なれども、用ひたる意はただなまじひにといふ意、又うつりては、かへりてといふ意にも用ひたり。然るを言の本によりて、うちまかせて、中間なる意に用ひてはたがふなり。又、ころぐるしといふ言は、今の俗言よのことに氣の毒なるといふ意に用ひたるを、言のままに心の苦しきことに用ひてはたがへり。さればこれらにて萬の言をもなずらへ心得て、まづいにしへに用ひたるやうをさきとして明らめしるべし。言の本にのみよりては、中中に古にたがふことおほかるべし。

三三 今の人の歌文ひがごと多き事

ちかき世の人の、は、うたも文も大かたはよろしと見ゆるにも、なほひがごとのおほきぞかし。されどそのたがへるふしを見しれる人、はた世になければ、ただかいなでにこかしこえんなる



詞をつかひ、よしめきてよみなし、かきちらしたるをば、まことによしと見て、人のもてはやし、ほめたつれば、心をやりてしたりがほすめる、いとかたはらいたく、をこがましくさへぞ思はるる。  
 さるにつけては、かくいふおのがものすることも、なほいかにひがごとあらむと、物よく見しれらむ人のころぞはづかしかりける。人のひがごとのよく見えわかるるにつけては、我はよくわきまへたれば、ひがごとはせずと思ひほこれど、いにしへのこのころをさとりしるすぢは、かぎりなきわざにしあれば、この外あらじとは、いとなむさだめがたきわざなりける。

三四 歌も文もよく整ふは難き事

ちかき世の人の歌ども文どもを見あつむるに、一ふしをかしと目とまることは、ほどほどにあまたあんめれど、それはたいか

もうこしの云々書  
 經に、九俣功虧  
 一簣とあるをいふ。

富士谷成章 京都の人、北邊と號し、和漢の學に通じ、特に音韻に通じてゐた。安永八年(三三三)歿、年四十二。かざし抄、三卷。副詞・感動詞・代名詞の類の意義用法を説明した書。  
 あゆひ抄 五卷。助詞を解釋した書。  
 六運圖略 一卷。國語の變遷を、六期に分ち、年表風に現した書。

にぞやおほゆるところはまじりて、大かたきずなくととのひたるはをさをさ見えず。これを思へば、後の世にしていにしへをまねぶことは、いといたかたきわざになむありける。いにしへのかしこき人人のだに、これはしも露のきずなしとおほゆるは、多かる中にもすくなくなむあれば、まして今の人の、いささかなるきずをさへにいひたてむは、あながちなるにやあらむ。されど、同じくは、人のいささかも難ずべきふしませぬさまにこそあらまほしけれ。よきほどにて心をやるをば、もろこしのいにしへの人もよからぬことにいひおきけるをや。

三五 富士谷成章といひし人の事

ちかきころ京に、富士谷専右衛門成章といふ人ありけり。それが作れるかざし抄あゆひ抄六運圖略などいふふみどもを見て、



おどろかれぬ。それよりさきにも、さる人ありとはほの聞きたりしかど、例の今やうのかいなでの歌よみならむと、耳もたたざりしを、このふみどもを見てぞ、しれる人にあるやうとひしかば、このちかきほどみまかりぬと聞きて、又おどろかれぬ。

そもそもこのごろのうたよみどもは、すこし人にもまさりてもちひらるるばかりにもなれば、おのれひとりこの道えたるかほして、心やり、たかぶるめれど、よめる歌、かける文、いへる説などをきけば、ひがごとのみ多く、みないとまだしきものにて、これとおほゆるはいとかたく、ましてぬけ出でたるはたえてなき世に、この富士谷はさるたぐひにあらざ。又ふるきすぢをとらへて、みだりに高きことのみにふともがら、はたよにおほかるを、さるたぐひにもあらざ。萬葉よりあなたのことはいかがあらむしらず。六運の辨にいへるおもむきを見るに、古今集よりこなたさま

六運の辨 成章の著  
前記の六運圖略に  
附した説明書。

北邊集 一卷。成章  
の歌集。

その子 富士谷御杖。  
國學者。文政六年  
(一八一五)歿、年五十  
六。

桃花坊 兼良の邸宅  
のあつた處。

應仁のみだれ 應仁  
元年(三三三)より文  
明九年(三三五)に至  
る京都の兵亂。

一條兼良 關白藤原  
經嗣の第二子。博  
學多聞で朝儀に熟  
し、和歌に巧であ  
つた。文明十三年  
(一四八二)薨、年八十。

の歌のやうをよく見しれることは、大かたちかき世にならぶ人  
あらじとぞおほゆる。北邊集といひて歌の集もあるを見たるに、  
よめるうたはさしもすぐれたりとはなけれど、いまの世の歌よ  
みのやうなるひがごとは、をさをさ見えなむありける。さもあ  
たらしき人の、はやくもうせぬることよ。

その子の専右衛門といふも、まだとしわかけれど、心いれてわ  
ざとこの道ものすときくは、父のけはひも、そはりたらむと、たの  
もしくおほゆかし、それが物したる書どもも、これかれと見えし  
らがふめり。

三六 桃花坊のふみぐらの書の事

應仁のみだれに、一條兼良のおとどの、桃花坊の文庫やけて野  
原となり、そのあたりの盜賊ども、たちこぞりて、七百餘合のしみ



しみのすみか 書籍  
を食ふ蟲の棲處。  
古書のこと。  
七百餘合 合は蓋の  
ある器具を數へる  
語。七百餘櫃。  
竹林抄 十卷。連歌  
の集。兼良の撰。

のすみかを引きちらし、大路を反古となしたりしよし、このおと  
どの竹林抄の序にかかせ給へり。みだれ世のしわざあさましな  
どもよのつねなり。そもそも七百餘合の書は、合ごとに五十巻と  
はかりて、三萬五千餘卷のふみなり。

三七 神をなほざりに思ひ奉る世のならひを悲しむ事

世の人の神をなほざりに思ひ奉るは、かへすがへすこころう  
きわざなり。さるはほどほどにたふとみ奉らぬにしもあらざん  
めれど、ただ世のならひの人なみなみのかいなでのたふとみこ  
そあれ、まことに心にしめて尊みたてまつるべきことを思ひわ  
さまへず、ただおろそかにぞ思ひたんめる。

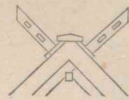
目にこそ見えね、この天地萬の物の出で來始めしも、又むかし  
今の世の中の大き小さきもろもろの事も、人の身のうへくひ物

まがつひ 禍津日。  
凶事の神、悪神の  
こと。

著物居どころ、なにくれ、もろもろの事も、ことごとく神の御めぐ  
みにかからざることばなきを、さるゆゑよしをばわすれはてて、  
なべての人、ただまがつひのまがごとくのみまじこり、心をかた  
むけて、よろづにさかしだつ人、はたからぶみごころを心とはし  
て、まれまれに神代の御事どもを聞きて、ただはるけき世界の  
むかしがたりをきくがごと、よそげにのみ思ひ過して、そは皆今  
のよの中、おのが身身のうへにかかれる本なることをおもひた  
どらず、よろづよりもかなしきは、神の社、神わざのおとろへなる  
を、かばかりめでたき御代にしも、もろもろのふるき神の御社ど  
もの、いみじくおとろへませるを、なほし奉らむのこころざしあ  
る人の世にいでこぬこそ、いとともいともくちをしけれ。  
そもそも宣長、かかるすぢの事をかへすがへすいひ出づる、人  
はうるさしとも思ふらめど、この事のうれたさのあけくれ心に



千木たかく、上代の建築法に、屋根の上に高くさし出でゐる材を千木といふ。神社建築には千木を高く立てるのが古風である。



わすらるる間もなくおぼゆるから、筆だにとれば、かきいてまほしくてなむ。

治れる御代のしるしを千木たかく神のやしろに見るよしもがな

三八 物まなびの心ばへ

むかしは皇國のまなびとて、ことにはなくて、ただか  
らまなびをのみしけるほどに、世世をふるまみに、いにしへの事  
はやうやうにうとくのみなりゆき、から國の事はやうやうにし  
たしくなりもてきつつ、つひにそのころは、もはらからざまに  
うつりはてて、上つ代の事は、物の意はさらにもいはず、言葉だに  
聞きしらぬ異國ひとくにのさへづりをきくがごと、ものうとくぞなりに  
ける。

かくて後にいたりて、皇國の學をもはらとすることもしま  
りつれども、しか漢意の久しくしみつきたる人心にしあれば、た  
だ名のみこそ皇國のまなびにはありけれ、いひといひ、おもひと  
思ふことは、猶みなからにぞありけるを、みづからもさはおぼえ  
ざるなめり。

されば近き世、まなびの道ひらけて、よろづさかしくなりぬる  
につけても、なかなかにそのからごころのみ深くさかりにはな  
りて、古の意はいよいよはるかなむなりけるを、このちかき  
ころになりてぞ、そこに心づきぬる人の出で來そめて、世はみな  
からなることをさとりて、人も我もいにしへのころをたづぬ  
る道の明りそめぬる。しかすがに、神直毘かむなまび・大直毘の神のましまし  
ける世は、なほゆくさきいとたのもしくなむ。

神直毘 大直毘の神  
共に不正なことを  
改め直す神。



三九 古より傳はれる事の絶ゆるを悲しむ事

世の中に、いにしへの事のいたくおとろへたる、またひたぶるに絶えぬるなどもおほかるを、かかるめでたき御代にあたりて、何事もおこしたてまほしき中に、たえたるもあとをたづねて又はじめむに、はじめつべきはおそくもとくも、直毘の神の頼みのなほのこれるを、一たび絶えてはまたつぐべきよしなく、又はじむべきたよりなき事どもこそ、殊にいふかひなくちをしきわざにはありけれ。ふるき氏氏など、神代のゆゑよし重きなどはさらにもいはず、さらぬも、はやく末のたえはてぬるがおほき、今はいかに思ひても、ふたたびつぎおこすべきよしなくなむ。これらをおもふに、萬のふるきことは、わづかにも残りて絶えざるをだに、おとしあぶさず、よくとりしたためて、今より後たゆまじきさまに、いかにいかにもつよくかたくなしおかまほしきわざぞ

あぶさず 餘さず、遺さず。

かし。

四〇 もろもろの物の事をよく記したる書あら

まほしき事

よろづの草木鳥獸、なにくれ、もろもろの物の事を、上の代よりひろめ委しく考へてしるしたる書こそあらまほしけれ。もろこしの國には、本草などいふ、さるすぢのふみども、いにしへよりこころあんなるを、御國には、わづかに源順の和名抄のみこそはあれ。かの書のさま、すべていとしどけなくからぶみを引出でたるやうなども正しからず、いにしへさまのこと、にうとく、すべてたらはぬことのみなり。されどこれをおきては、ふるくよるべき書のなきままだに、人も我も、もはら萬の物の考のよりどころにはするなり。

本草 支那の藥物學の書で、動植物について記述してゐる。  
源順 平安朝時代の學者で、詩歌をよくした。永觀元年(一〇六〇)卒、年七十有三。  
和名抄 和名類聚抄のこと。この書は、物の漢名を擧げてこれに訓と説明とを加へた一種の漢和辭典である。

三九 古より傳はれる事の絶ゆるを悲しむ事  
四〇 もろもろの物の事をよく記したる書あらまほしき事



新撰字鏡 十二卷。  
平安朝時代の僧昌  
住の著。漢字の訓  
義を記した字書。

ちかきころ、新撰字鏡といふもの出て、ふるくはあれども、事ひ  
ろからずかりそめなるうへに、あやしきもじども多くなどして、  
ことさまなるふみなるを、さすがに和名抄をたすくべき事ども  
はおほくぞありける。これらをおきて、後の世に作れるどもは、あ  
またあれども、ただみな例のからまなびのかたによれるのみに  
て、皇國のまなびのためには、をさをさ用もなきを、今いかで古事  
記書紀萬葉集など、すべてふるきふみどもをまづよく考へ、中む  
かしの書ども、今の世のうつつの物まで、よく考へ合はせて、和名  
抄のかはりにも用ふべきさまの書を作り出でむ人もがな。おの  
れはやくよりせちにこの心ざしあれど、たやすからぬわざにて、  
物のかたてにはえしも物せず。いまはのこりのよはひもいとす  
くなきこちすれば、思ひたえにたれば、今より後の人をだにと、  
いざなひおくになむ。

越前の國の府中 今  
の福井市。  
伊藤東四郎多羅 福  
井の人。その著に  
萬葉動植考三卷が  
ある。

この六七年ばかりさきに、越前の國の府中の人とて、伊藤東四  
郎多羅といへる、まだわかきをのこなりけるが、とぶらひきて、か  
たりけるは、多羅が父はいはゆる物産の學を好みてもものしける  
ままた、多羅もわらはなりしほどよりそのすぢに心よせけるを、  
もろこしさまの事はたれもたれも物するわざにて、人のふみは  
たよにともしからぬを、皇國のこのすぢの事よくしるしたるは、  
いまだ見え聞えざんなれば、多羅は今より皇國のこのまなびを  
物してむと心ざして、かつが考へたる事どももあるなり」とて、  
一卷二卷かきあつめたるをも、とうてて見せけるを、はしばしい  
ささか見たりしに、おのが思ふにかなへるさまにて、考もよろし  
く見えしかば、これいかでおこたらずつとめて、しはててよ」と、ね  
んごろに、かへすがへすすすめやりしを、さて後いかになりぬら  
む、音もなし。ちかきころ、そのちかき國の人にあへりしにこの事



かたりてとひけるに、たしかにはしらぬさまにて、かのをのこは  
みまかりぬとかほのかに聞きしよしいひたりし、それまことな  
らば、いとあたらしくちをしきわざにぞありける。

四一 物をときさとする事

すべて物の色形、又事のころをいひさとすに、いかにくはし  
くいひても、なほさだかにさとりがたきことつねにあるわざな  
り。そは、その同じたぐひの物をあげて、その色に同じきぞ、何の  
たちのごとくなるぞといひ、ことの意をさとすには、その例を一  
つ二つ引出づれば、言おほからで、よくわかるるものなり。

四二 更級の日記に見えたる事

さらしなの日記にいはいはく、二むらの山の中にとまりたる夜、大

更級の日記 一卷。  
菅原孝標の女の  
著。後一條天皇の  
治安元年(六六)よ

り後冷泉天皇の康  
平元年(七〇)まで  
の自傳を記したも  
の。

二むらの山 愛知縣  
額田郡。

きなる柿の木の下に、いほをつくりたれば、よひとよいほのうへ  
に柿のおちかかりたるを、人人ひろひなどすといへり。これは菅  
原孝標といひける人の女のかける物にて、さしもとほき世の事  
にもあらぬを、そのかみなほ、旅のやどりはかかる事もありける  
をおもへば、つねに歌によむなる草の枕も、あがれりし世にはま  
ことにさることにぞありけむかし。

四三 假字のさだ

源氏物語梅が枝の巻に、よろづの事、むかしにはおとりさまに、  
浅くなりゆく世の末なれど、かんなのみなむ、今の世はいとときは  
なくなりたる。ふるきあととは、さだまれるやうにはあれど、ひろき  
こころゆたかならず、一すぢに通ひてなむありける。たへにをか  
しきことは、とよりてこそ書きいづる人人ありけれといへり。こ

源氏物語 五十四卷。  
紫式部の作。平安  
朝時代の小説。

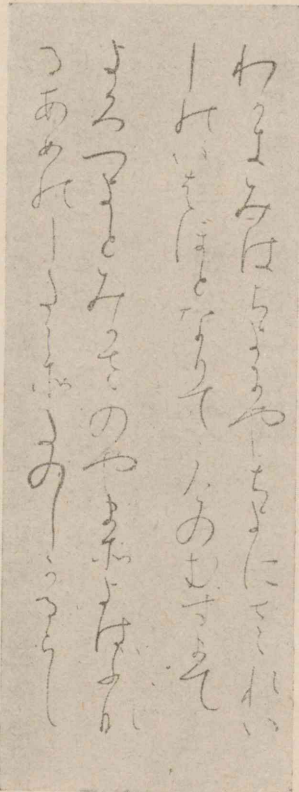


空海法師 眞言宗の祖。承和二年(一〇三〇)歿す。諡を弘法大師といふ。

わかきみはちよにやちよにさ、れいしのはほとなりてこげのむすまてよるつよとみかさのやまそよはふなるあめのしたこそたのしかるらし

藤原行成 平安朝時代の書家。萬壽四年(一〇九七)薨、年五十六。

のかんなどいへるは、いろは假字のことなり。このかなは、空海法師の作りといふを、萬の事はじめはうひうひしきを思ふに、これも出て來つるはじめのほどは、ただ用ふるにたよりよきかたをのみこととはして、その書きざまのよきあしきをいふことな



藤原行成筆蹟

どまでは及ばざりけむを、やうやうに世にひろくかきならひて、年をふるままに、書きざまのよきあしきをもさだすることにはなれりけむを、源氏物語つくりしころは、この假字出て來て、まだいとしも遠からぬほどなりければ、げにやうやうにをかしくたへにかきいづる人のいでくべきころほひなり。

たることをしる 老  
子に「知<sup>ル</sup>足<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>  
富<sup>ム</sup>」知<sup>レ</sup>足<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>  
富<sup>シ</sup>」  
足<sup>ラ</sup>不<sup>ラ</sup>富<sup>シ</sup>」

四四 足る事を知るといふ事

たることをしるといふは、もろこし人のつねにいみじきわざにすめることなるを、これまことによきことにて、しか思ひとらば、ほどほどにつけて、たれもたれも心はいと安かりぬべきわざにぞありける。然はあれども、高きみじかき、ほどほどにのぞみねがふことのつきせぬぞ、世の人の眞情<sup>まこと</sup>にて、今はたりぬとおぼゆる世はなきものなるを、世には足ることしれるさまにいひて、さるかほする人の多かるは、例のからやうのつくりごとにかそあれ。まことにきよく然思ひとれる人は、千萬の中にもありがたかるべきわざにかそ。

四五 朝鮮の國にて加藤清正の人がたを射るわざ



新井氏 新井白石。學者にして政治家。享保十年(二三八)卒、年六十九。藩翰譜 三十卷。江戸幕府時代初期の諸侯の歴史。水營の軍官 海軍の軍人。

新井氏の藩翰譜にいはく、朝鮮の國慶尙全羅道等の水營の軍官、年毎に日をうらなひて、諸營戰艦をあつめて、海にうかべて、海神を祭るわざあり。芻にて人像を造り、これを射てしづむ。この事、かの國の人は祕すれども、よくきけば、清正を呪咀するわざにて、



その人像は清正にかたどれるなり。加 然るに、かの國のよく射るものといへども、おそれて中つることあたはず。清 ざるを、いづれの年にかありけむ、射正 あてたる者ありければ、さうなき高名といひののしりけるに、その射た

る者、たちまちに物にくるひてぞをどりはしりける。その親族ども、清正の靈をまつりて、深く罪を謝しけるにぞ、かの人はうつし心になりける。それより後は、いよいよ皆おそれて、射るものか

寛文 後西天皇の御代の年號。

加藤氏の條 藩翰譜の加藤家のことを記した部分。

たらし姫神の命 神功皇后、御名を息長帯比賣の命と申す。

へりてあたらむことをおそるとぞ。又本朝寛文の中ごろ、かの例の祭に、水營の軍艦ども海にうかびけるに、にはかに風はげしくおこり、浪あらく立ちて、艦どもおほくやぶれにけり。これ清正のたたりなりとて、いたくおそれけるよし、對馬の國人にひそかにうけ給はりぬと、加藤氏の條に見えたり。

宣長これをよみて、よみけるは、  
いそしきやこのおみにこそたらし姫神の命の御たまた  
びけめ

かの朝鮮のえだちに、もろこしの國まで、大御國の光をかがやかししは、この主になむありける。

四六 物まなびはその道をえらびて入りそむべき事

ものまなびに心ざしたらむには、まづ師をよくえらびて、その



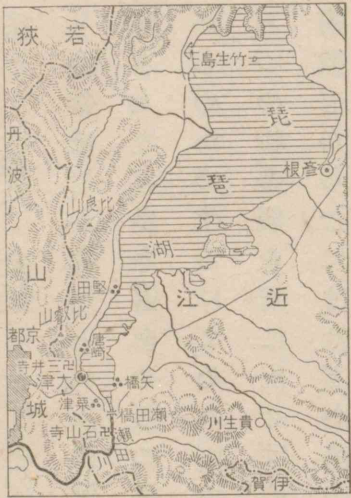
うひやまぶみ 一卷。  
宜長の著書。初め  
て學問に志す者の  
爲に書いたもの。

立てたるやう、教のさまをよくかむがへて、したがひそむべきわ  
ざなり。さとりにぶき人はさらにもいはず、もとより智さとしとき人と  
いへども、大かたはじめにしたがひそめたるかたに、おのづから  
心はひかるるわざにて、その道のすぢわろけれど、わろきことを  
えさとらず。又後にはさとりながらも、としごろのならひはさす  
がにすてがたきわざなるに、我がとかいふ禍わざ神つみさへ立ちそひて、と  
にかくにしひごととして、なほそのすぢをたすけむとするほどに、  
終によき事はえ物せて、よのかぎりひがごとのみして、身ををふ  
るたぐひなど世におほし。かかるたぐひの人は、つとめて深くま  
なべば、まなぶまにまにいよいよわろきことのみさかりになり  
て、おのれまどへるのみならず、世の人をさへにまどはすことぞ  
かし。かへすがへすはじめより師をよくえらぶべきわざになむ。  
この事は「うひやまぶみ」にいふべかりしをもらしてければ、ここ

にはいふなり。

四七 八景といふ事

世に八景といふことのここにもかしこにも多かるは、もとも  
ろこしの國のなにかしの八景といふをならひてさだめたる、近



江八景ぞはじめなめるを、又それ  
にならひてなりけり。さるは、むげ  
に見どころもなきところをさへ  
に、しひて入れなどしたるがおほ  
かるは、いかにぞや。まことにその  
景を賞めづとならば、けしきよきか

ざりをとりにてこそさだむべけれ。その數にはさらにかかはるま  
じく、いくつにてもあるべきに、數をかたく守りて、八つにととの

もろこしの國云々  
支那の瀟湘八景即  
ち、瀟湘の夜雨、  
山市の晴嵐、遠浦  
の歸帆、煙寺の晚  
鐘、平沙の落雁、  
漁村の夕照、洞庭  
の秋月、江天の暮  
雪をいふ。  
近江八景 比良の暮  
雪、矢橋の歸帆、  
石山の秋月、瀬田  
の夕照、三井の晚  
鐘、堅田の落雁、  
粟津の晴嵐、唐崎  
の夜雨。



へむとしたるこそ、こちなくおほゆれ。

四八 金銀ほしからぬ顔する事

金銀ほしからずといふは、例の漢かやうの偽いつはりにぞありける。學問する人など、良き書をせちに得まほしかるものから、金銀はほしからぬかほするにて、そのいつはりはあらはなるをや。今の世、よろづの物、金銀をだに出せば、心にまかせてえらるるものを、良き書欲しからむには、などか金銀ほしからざらむ。

然しかはあれども、はばかることなくむさぼる世のならひにくらぶれば、偽いつはりながらもさるたぐひはなほはるかにまさりてぞあるべき。

四九 雪螢を集めて書よみけるもろこしの故事

孫康 晋の人。

車胤 晋の人。

もろこしの國に、むかし孫康といひける人は、いたく學問を好みけるに、家まづしくして、油をえかはざりければ、夜は雪のひかりにてふみをよみ、又同じ國に車胤といひし人も、いたく書よむ事をこのみけるを、これも同じやうにいと貧しくて、油をえ得ざりければ、夏のころは螢を多くあつめてなむよみける。この二つの故事はいと名高くして、しらぬ人なく、歌にさへなむおほくよむことなりける。

今思ふに、これらもかの國人の例の名をむさぼりたるつくりごとにぞありける。その故は、もし油をえ得ずは、よるよるはちかどなりなどの家にもおして、そのともし火の光をこひかりても、書はよむべし。たとひそのあかり心にまかせず、はつはつなりとも、雪螢にはこよなくまさりたるべし。又年のうちに雪螢のあるはしばしのほどなるに、それがなきほどは、夜は書よまでありけ



るにや。いとをかし。

五〇 静なる山林を住みよしといふ事

世世の物しり人、又今の世に學問する人なども、みなすみかは、里とほくしづかなる山林を住みよく、このましくするさまにのみいふなるを、われはいかなるにか、さらにさはおほえず。ただ人げしげく、にぎははしきところの好ましくて、さる世ばなれたるところなどはさびしくて、心もしをるるやうにぞおほゆる。さるは、まれまれにも、して一夜たびねしたるなどこそは、めづらかなるかたにをかしくもおほゆれ。さる處につねにすまほしくは、さらにおほえずなむ。

人の心はさまざまなれば、人うとくしづかならむところを、すみよくおほえむもさることにて、まことにさ思はむ人も、世には多かりぬべけれど、又例のつくりごとの漢ぶりの人まねに、さいひなして、なべての世の人の心とことなるさまにもてなすたくひも、中にはありぬべくや。かく疑はるるも、おのが俗情さとしころのならひにこそ。

五一 おのが京のやどりの事

宣長、享和のはじめの年、京にのぼりてありしほど、やどれりしところは、四條の大路の南づらの烏丸のひむがしなる處にぞありけるを、家はややおくまりてなむありければ、物のけはひうとかりけれど、朝のほど夕ぐれなどには、門に立ちいでつつ見るに、道もひろくはればれしきに、ゆきかふ人しげく、いとにぎははしきは、おなかに住みなれたる目うつしこよなくて、めさむるこちなむしける。京といへど、なべてはかくしもあらぬを、この四條

享和 光格天皇の御代の年號。  
四條 京都市の略中央部を東西に通ずる大道。  
烏丸 御所の西側に沿うて南北に通ずる大道。



三ところの大都 三  
大都會。京都・江  
戸・大阪のこと。

の大路などは、ことにぎははしくなむありける。  
天の下三ところの大都おほみやの中に、江戸・大阪はあまり人のゆきき  
多く、らうがはしきを、よきほどのにぎはひにて、よろづの社社寺  
寺など、古のよしあるおほく、思ひなしたふとく、すべて物きよら  
に、よろづの事みやびたるなど、天の下にすまほしき里は、さ  
いへど京をおきて外にはなかりけり。

つらつら椿 萬葉集  
卷一に、坂門人足、

「巨勢山のつらつ  
ら椿つらつらに見  
つつ思ふな巨勢の  
春野な。」  
巨勢山 奈良縣南葛  
城郡にある。

五二 つらつら椿

萬葉集の一の卷に、「巨勢山のつらつら椿つらつらに」といふ歌  
をおもひ出てわれもよめるは、

世の中をつらつらつばきつらつらに思へばおもふこと  
ぞおほかる

さるはわがみのうへのうれへにもあらず、なべての世のたた

ずまひ、人のありさまのよきあしき、事につけて、おふけなく思ふ  
すぢの心にこめがたきは、をりをりこの巻巻にももらせるふし  
もおほかれど、猶いひてもいひてもつきすべくもあらずなむ。

五三 一言一行によりて人のよきあしきを定むる事

人のただ一言ただ一行によりて、その人のすべての善き悪し  
きを定めいふは、から書をつねなれども、これいとあたらぬこと  
なり。すべてよき人といへども、まれにはことわりかなはぬわ  
ざもまじらざるにあらず、あしき人といへども、よきしわざもま  
じるものにて、生けるかぎりのしわざ、ことごとくに善き悪しき一  
かたにさだまれる人は、をさをさなきものなるを、いかでかはた  
だ一言一行によりては定むべき。



五四 今の世人の名の事

近き世の人の名には、名に似つかはしからぬ字をつく事多し。又すべて名の訓はよのつねならぬが多きうちに、近き頃の名には、殊にあやしき字、あやしき訓ありて、いかにもよみ難きぞ多く見ゆる。すべて名はいかにもやすらかなるもじの、訓のよくしられたるこそよけれ。これに名といふは、いはゆる名乗・實名なり。某右衛門・某兵衛の類の名の事にはあらず。さて又その人の性しやうといふ物にあはせて名をつくるは、いふにもたらぬ愚なる習なり。すべて人に、火性・水性など、性といふ事は、さらになきことなり。

五五 繪の事

人の像かたを寫すことは、つとめてその人の形に似むことを要す。面やうはさらにもいはず、そのなりすがた、衣服のさまにいたる

名乗・實名 江戸時代の男子の平生用ひる俗名通稱(例へば某右衛門・某兵衛)に對して、古來の習慣で附ける名をいふ。  
性 人の生れた年の干支の五行を、その人の性として、木性・火性・土性・金性・水性とし、相生相尅の理を説くをいふ。もとより無稽の説である。

まで、よく似たらむと心すべし。されば人の像は、つとめてくはしく、こまかにうつすべきことなり。然るに今の世には、人の像を寫すとても、ただおのが筆のいきほひを見せむとし、繪のさまを雅みやびにせむとするほどに、まことの形にはさらに似ず。また眞の形に似むことをば要せず、ただ筆の勢を見せ、繪のさまを雅みやびにせむとすることをむねとするから、すべてことそぎて、くはしからず、さらさらとかくゆゑに、面やうなど、その人に似ざるのみならず、甚だいやしき賤・山がつかほやうにて、さらに君子有徳の人のかほつきにあらず。これいとにくむべきことなり。

五六 又

古人の像をかくには、その面やういかにありけむ、知りかたければ、ただその人の位にかなへ、徳にかなへて、位たかき人のかた



は、面やうすべてのさまけだかく、まことにたかき人と見ゆるやうに書くべく、徳ありし人は、又その徳にかなへてかくべし。然るに後の繪師、この意を思はず、ただおのが筆の勢を見せむとのみするほどに、位たかき人、徳ある人も、ただしづ山がつの如く、愚味なる人の如くかきなせり。

五七 御の字

御の字のこと、もろこしにては、その國の王の事ならてはいはず。臣下にいへることなし。皇國にては、みといふにこの字をあてたれど、御は天皇にかぎらず、もとより下々にても尊みて廣くいふ言なり。大御といふぞ、おほかた天皇にかぎりていへる。されば大御といふは、もろこしの御の字のつかひざまに近し。さて後には大御を音便におほんといひて、天皇にかぎらず廣くいふこと

となり、又その後には、そのおほんのほを省きて、おんといひ、後には又んをも省きて、おとのみいふ。今の俗には、物に書きては、御の字もおんといへども、口語にはおとのみいへり。まれまれに、おみ帯・おみ裕・おみ足などいふことのあるは、大御てふ古言の、たまたまにのこれるなり。されど、こはなべてにはわたらぬ事なり。

五八 人のうまれつきさまある事

人の生れつき、さまざまあるものなり。物の義理、事の利害など、すべて萬の事を、心にはよく思ひわきまへながら、口にはえいはぬ人もあり。また口にはよくいへども、しか行ふ事はえせぬ人もあり。又口には得いはねども、よく行ふ人もあり。又口にはよくいへども、文には得かきいでぬ人もあり。又口にはえいはねども、文にはよく書きいづる人もあるなり。



橘 芸香料の植物。柑子の一種。

五九 古よりも後の世のまされる事

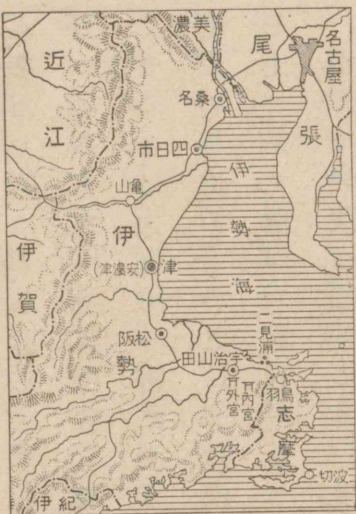
古よりも後の世のまされること、萬の物にも事にもおほし。その一つをいはむに、いにしへは、橘をならびなき物にしてめてつるを、近き世には蜜柑といふ物ありて、この蜜柑にくらぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外、柑子かうじ・柚ゆ・九年母橙などのたぐひおほき中に、蜜柑ぞ味ことにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまされる物なり。この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて今はある物も多く、古はわろくて今のはよきたぐひも多し。これをもておもへば、今よりも亦いかにあらむ。今に勝れる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古はよろづに事たらず、あかぬ事おほかりけむ。されどその世にはさはおほえずやありけむ。今よりも後また物の多くよきかいてこむ世には、今をもしか思ふべけれど、今の人、事たらずとはおほえぬが如し。

六〇 伊勢の國

かた國のうまし國 半分の國土で上等な國。日本書紀、垂仁天皇の卷に、伊勢の國を「傍國可怡國也」とあるに據る。

山田 今は宇治と合して一市をなす。

安濃津 今の津市。



伊勢の國は、かた國のうまし國と古語にもいひて、北のはてより南のはてまで、西の方は山山つらなりつづきて、まことに青垣をなせり。東の方は入海にて、いせの海といふこれなり。かくていづこもいづこも山と海との間ひろく、平原にして、北は桑名より南は山田まで、二十里あまりがほど、山といふ物一つもこゆることなく、ひたつづきの國原なり。その間に、廣き里おほかる中に、山田・安濃津・松阪・桑名など、殊ににぎははしく大きなる里なり。大かた京より江戸まで七國八國を経てゆく間に、かばかりの大里は、近江



駿河の府 今の静岡市。  
四日市 今の四日市市。  
白子 河藝郡にある町。

大御神の宮 皇大神宮。

手代 商家の使用人の一。番頭と丁稚との間にある者。

の 大津と駿河の府とをおきてはあることなし。外の國國も思ひやらる。猶件の里里につぎて、四日市・白子などよき邑なり。

かくてこの國、海の物、山野の物、すべてともしからず。暑さ寒さも、あだし國にくらぶるに、さしも甚しからず。但しさむさは、北の方へよるままに次第に寒し。風はよくふく國なり。國のにぎははしきことは、大御神の宮にまうづる旅人たゆることなく、ことに春夏の程は、いとにぎははしき事、大かた天の下にならびなし。土こえて、稲いとよし。たなつ物も、畑つ物も、大かた皆よし。

かくて松阪は、ことによき里にて、里のひろき事は山田につぎたれど、富める家おほく、江戸に店といふ物をかまへおきて、手代といふ者をおほくあらせて、あきなひさせて、あるじは國にのみ居てあそびをり。うはべはさしもあらで、うちうちはいたくゆたかにおごりてわたる。すべてこの里、町すぢゆがみ、正しからず、家

なみわろく、一つごとに一尺二尺づつ出て入りてひとしからず、いといとしどけなし。家居はさしもいかめしからず。されど内内のすまひはいとよし。水はよき處とわろき處とありて、ひとしからず。川水すくなく、潮もささねば、船かよはず。山へは大方一里あまり、海へは半里あまり、諸國のたよりよし。ことに京・江戸・大阪は、たよりよし。諸國の人の入りくる國なれば、いづこへもいづこへもたよりよし。

人の心はよくもあらず、おごりてまことすくなし。人のかたち、男も女もあなかびたること更になくよろし。すべてをさをさ京におとれることなし。人の物いひは、尾張の國より東の國國はなまり多きを、伊勢は大かたなまりなし。されど山城・大和などは、何となく聲いやく、詞もいやくしきこと多し。いはゆる吳服物小間物のたぐひ、松阪はよき品を用ひて、山田・津などとはこよなく代



物よし。されば商人の京よりしいるるも、松阪はことに物よく上上の品なり。京のあき人つねに來かよふなり。時時のはやり物もをり過さず。諸藝は處がらにあはせてはよきこともあらず。もろもろの細工いと上手なり。あきなひごとくにぎははし。神社佛閣すべてにぎははし。すべてこの國は、あだし國の人おほく入りこむ國なる故に、よからぬ物も多く、盜なども多し。松阪は魚類、野菜などすべてゆたかなり。されど魚には鯉、鮒すくなく、野菜にはくわゐ、蓮根などすくなし。松阪のあかぬ事は、町筋の正しからずしどけなきと、船のかよはぬとなり。

## 六一 神のめぐみ

上は位高く、一國一郡をもしりて、多くの人をしたがへ、世の人にうやまはれ、萬ゆたかにたのしくてすぐし、下はうゑず食ひ、さ

むからず著、やすく居る、これらみな君のめぐみ、先祖のめぐみ、父母のめぐみなることはさるものにて、その本をたづねれば、件の事どもよりはじめ、世にありとあるもろのこと、みな神のみたまにあらずといふことなし。しかれば世にあらむ人、神を尊まではえあらぬ事なるを、常になりぬることは、さしも心にとめず、忘れをるならひにて、君のめぐみ、先祖のめぐみをもさしもおもはず、もとより神の御たまなることはみなわすれはてて、思ひもやらぬは、いとかしこくあるまじき事なり。

一日も食ひ物なくはいかにせむ、著物なくはいかにせむ。これを思はば、君のめぐみ、先祖、父母のめぐみを常にわするべきにあらず。しかるを世の人、さることをばしらず、おもはず、神をばただよそげに思ひ奉りて、たまたまさしあたりて祈る事などかなはねば、その神をうらみ奉りなどするは、いとかたじけなきこ



となり。生れいづるより死ぬるまで、神の恵の中に居ながら、いさ  
さか心にかなはぬことありとも、これをうらみ奉るべきこと  
かは。又祈ることきき給はねば、神を尊みてやくなき物のごと思  
ひなどするはいかにぞや。

かへすがへすも、萬の事ごとく神のみたまなることをつ  
ねにわするる事なくは、おのづから神のたふとまではかなはぬ  
事を知るべし。たとへば百兩の金ほしき時に、人の九十九兩あた  
へて、一兩たらざるが如し。そのあたへたる人をば悦ぶべきか、恨  
むべきか。祈ることかなはねばとて、神をえうなきものにうらみ  
奉るは、九十九兩あたへたらむ人をえうなきものに思ひてうら  
むるが如し。九十九兩のめぐみを忘れて、今一兩あたへざるを恨  
むるはいかに。

兩昔の貨幣の名目。  
金貨では一分の四  
倍、銀貨では四友  
三分を云ふ。

六二 道

神の道は、世にすぐれたるまことの道なり。みな人しらではか  
なはぬ皇國の道なるに、わづかに絲筋ばかり世にのこりて、ただ  
まことならぬ他の國國の道のみはびこりにはびこれるはいか  
なることにかまがつひの神の御ところは、すべなき物なりけり。

國本文玉かつま〔新制版〕終



昭和十三年九月一日印刷  
昭和十三年十二月十三日訂正印刷  
昭和十三年十二月十七日訂正發行

國文 玉かつま(新制版)  
抄本

定價金參拾七錢

編者 武田祐吉

發行者 株式會社 明治書院  
東京市神田區錦町一丁目十六番地

取締役社長 三樹退三

印刷所 株式會社 明章印刷所  
東京市神田區三崎町二丁目一番地

印刷者 細谷祐三

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明

治書院

電話神田(25)二一四七番(3)





